小児がん患者の保護者が持つ口腔衛生管理に対する関心度と口腔有害事象発症の関連性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 美紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/996

1-R-3

小児がん患者の保護者が持つ口腔衛生管理に対する関心度と口腔有害事象発症の関連性

中村美紀[1)]

小児がんとは、15 歳以下に発症する様々ながんの総称であり、日本では年間約 2,500 人、こども 10.000 人に対し約 1 人の割合で新規発症しているが、がん全体の 1%にも満たない稀な疾患である。小児がんは化学療法や放射線療法に対し極めて感受性が高いという特徴を持つが、この化学療法中に口腔有害事象（う蝕、歯周病、口内炎、口腔乾燥）が高頻度で発症し、菌血症など感染症の起因となることが報告されている。このため、近年では口腔有害事象の症状軽減や重症化予防のために歯科受診が推奨され、がん治療前からの歯科における適切な口腔衛生管理は重要ながん支持療法のひとつとなった。しかし、この報告の多くは成人のものであり、小児がん患者の口腔衛生管理が口腔有害事象発症に有効であると示した報告は少ない。本研究では、小児がん患者の口腔衛生管理はこどもだけでなく、保護者が担うことが多いことに着目し、小児がん患者の保護者に対しアンケートを実施、がん発症前に持っていた口腔衛生管理に対する関心を調査することにより、関心度と小児がん患者の口腔有害事象発症との関連性を明らかにした。

1）神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科